

鷹渡る

タカが飛ぶところにはたくさんの動物がいる

サンバに限らず、タカ類は動物をたべる動物で、自然の食物連鎖では人間と同じ高い地位にいます。自然の中の「消費者」といったところです。

面白いのはヒナの育て方。1日おくらに4〜5つの卵を生み、最初の1〜2日から卵を抱きます。ということは、約1ヵ月後に卵から出てヒナになったとき、早くかえったヒナと遅いヒナとでは1週間もの差がでるわけです。その時期に親がたたくさんエサを取れば、体力の強い遅いヒナまで食べさせられますが、十分にエサが取れない——つまりエサになる動物が少ないときは、末っ子までエサがまわらず、体力の強い兄のヒナだけ育つこととなります。こうしてタカはエサの量でヒナの数が制限され、自然の法則の中で増えたり減ったりしているわけです。

これを見てもわかるように、タカがいるところには、そのエサになる小さな動物がたくさんいることになるんです。数多くの動物がいて、自然は自然と成り立ちます。

●サンバ タカの仲間。山形県から南の地方にすむ。冬はオーストラリアやニュージーランドなどへ渡り、小鳥も少し取る。9月下旬〜10月中旬にかけて、群れをついて渡る。「鷹渡る」は俳句の季語。渡りのコースの中でも、愛知県、鹿児島県、沖縄県などの半島の先から海を渡る途中で大きな群れが見られる。ツルやガンのような、サオサカギ形というきまっただけの鳥はとらず、トビが空中で円を描くように、1羽1羽、輪をついて飛びながら、全体として目的地へ行くといった渡りをする。そのとき、「ビッダー」とか「キンミイ」などの特徴ある鳴き声を出す。

全体が豊かであることの大きな証拠にもなります。生きてこそ「自然」

ところで、サンバの仲間たちは姿がよく似ていて殺されて飼育され、飾られるという被害を受けています。日本ではすべてのタカ類は法律で保護されている（猛禽類）はずですが、いわゆる飾りばねの鳥、風俗のある種類のトリたちが、この悪い習慣のためにずいぶん犠牲になっているようです。

私たちは、生きていてこそ「自然」を味あなければなりません。死体を飾ってよさうなだけのために、たくさんのトリが殺されていようものか、この秋サンバの声をきき、渡りを見るたびに考えさせられ、彼らの無罪な旅行を祈らずにはいられません。



財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告には、財団法人日本鳥類保護連盟の協賛を受けて、サントリー株式会社より制作されています。

愛鳥の心が育てるよい環境④

●愛鳥キャンペーンをよりご理解いただくためのパンフレット、美しい自然11「野鳥を見に」をおかけします。ご希望の方は、お名前・性別・年齢・住所・職業をお書きになり、封込として切手300円同封のうえ、次の宛先までお送りください。●〒103-91東京部中央区日本橋局区内私書箱231号 サントリー株式会社愛鳥キャンペーン「野鳥を見に」係